



リイシリ場所の具体的な開始はよくわかっていませんが、1670【寛文10】年にはすでにアイヌと和人（松前藩）の交易の場所として設定された商場【あきないば】が開設されていたといわれています（『津軽一統志』に記載）。

18世紀以降になると、有力商人にアイヌとの交易や商場の経営を請負わせ税金を納めさせる場所請負制度が確立しました。商人は場所請負人、税金は運上金、拠点施設は運上屋とよばれ、場所請負人は直接場所ですべて統括せず、現地の支配人に委ねていました。現地の場所の経営形態は、支配人（現地最高責任者）、通辞（アイヌ語通訳）、帳役（書記）、番人（アイヌ使役の監督）、和人の稼方がいました。

利尻島には、現在の本泊湾の湾奥部に運上屋（9間半×13間）が建てられ、場所経営に就いた和人の住まいや神社、アイヌの人びとの住まいや小屋が散在していました。当時リイシリ場所は、利尻と礼文2島を請負っていて、ニシン、サケ、マス、昆布、アワビ（串鮑、干鮑）、ナマコ（煎海鼠）、ホッケ、クジラなどの海産物が取引されていました。

場所請負人の変遷

- 1765【明和2】年 近江商人6代目岡田弥三右衛門（||（イチゼンバシ）恵比須屋）
- 1768【天明6】年 岡田勘七
- 1807【文化4】年 岡田源兵衛
- 1823【文政6】年 近江商人6代目藤野四郎兵衛（喜兵衛）（又十（マタジユウ）柏屋）～明治2年

利尻アイヌの推移

- 1670【寛文10】年 約300人 『津軽一統志』
- 1806【文化3】年 37人（9戸） 礼文71人 『西蝦夷地日記』
- 1803・05年に流行した天然痘により利尻・礼文あわせて220人の死者を出す。
- 1821【文政4】年 116人（28戸） ※利尻・礼文合計 『竹四郎廻浦日記』



リイシリ場所絵図（国立史料館蔵）に描かれた本泊周辺

安政期になると、利尻島のアイヌは40人程度で推移します。また、島での労働力不足を補うため、ソウヤやモンベツ、シャリから200～300人のアイヌを出稼ぎに連れてきたといわれています。

明治時代に入ると、場所請負制が廃止され、ニシン漁に関わる移住者が増加する一方、アイヌ社会はしだいに薄れていきました。

絵図に描かれている本泊の施設

運上屋1軒、蔵8軒、雑小屋3軒、井戸小屋1軒、夷家（アイヌの家屋）13軒（山手3、西側2、東側8）、弁天社

◆この件に関するお問い合わせは、利尻富士町教育委員会（電話0163-82-1370）まで